

## 第五章 密儀の殺人譜

1

六月九日付けの各紙の社会面は、長門雅樹誘拐殺人事件の記事で埋めつくされた。

仲条は東京の森中に、長門雅樹の首の切断口にも、魔符が貼りつけられていたらしいと情報を入れたが、記事にはしなかった。

第一発見者の二人の釣客にめいわくが掛かることにもなるし、前に庄川征雄殺人事件で赤根刑事から口止めされていたこともあり、発表したいのは山々だったが、自重した。

取材のために外出していた仲条宛に、何度か小矢部吾平から電話が入った。

デスクが吾平に、仲条が乗りまわしている車の自動車電話の番号を教えたので、吾平はそちらにも電話をしてきた。

仲条は黒部署の刑事に会い取材中だったので、

吾平が自動車電話のダイヤルをまわした三回目にやっと受話器をとり上げた。

「わたしは追われているんだ。きみに話しておきたいことがある」

吾平の声は切迫したものだだった。

「いまどこに？すぐ迎えに行きますが」

「あっ、やつらが……」

「もしもし……」

電話はもう切られていた。仲条は一旦、受話器をおいた。

（追われている？やつら？）

その短い文句の中に、吾平の緊張状態におかれた危機の状況がすべて表されていた。すぐにでも、仲条は吾平の身の危険を救うために、車を発進させたいところだったが、その方法は電話の声と共に切れた。

（話しておきたいことがある？）

このことは、仲条にしても同じ思いだった。吾平に長門雅樹誘拐殺人事件の真相をすべて話し、第一、第二の庄川征雄、比呂あすか殺人事件と合わせて、三つの事件の符合点を明かした上でこの謎めいた三連続殺人事件を、仲条は吾平に解いて欲しかった。

首なし死体。そして黒い魔符。

すでに、これらの事実を、吾平は知っているのだろうか？追われていると口にしたことは、吾平自身が事件に巻き込まれていることを意味していた。それとも吾平自身が黒い司祭者で、警察が吾平を追っているのか？仲条は社にもどるべく車を運転しながら、吾平からまた自動車電話が掛かるのを、ひたすら待った。

ほんとうは、千の平小屋に電話を入れ、吾平の妻に吾平の挙動について聞いたところだったが、そうすると、電話が

ふさがり、吾平が連絡する機会を失うのではないかと、仲条は頭を働かせたのである。もう一件、電話したいところがあった。(吾平が警察に追われる身なら？その事實は赤根刑事にたしかめる方法がある市内の繁華街に入る手前の県道で、仲条は一旦、車を停めた。公衆電話ボックスがあつたので、すぐそばに車をおき、自動車電話のベルの音が聞きとれる状況に仲条は身を置いた。

はじめに、千の平小屋に仲条は電話をした。吾平の妻が受話器を握った。

「日報新聞の仲条ですが、さつき、ご主人から電話をいただいて、何やらお急ぎのようで途中で電話が切れてしまったものですから」

「主人は朝から、急にいなくなりました、それでいま、みんなどこへ行ったかと心配しているところでした」

「そちらには何か変わったことでも」「昨夜遅く二度ほど電話がありました、一度はわたしがとったんですが、男の人で、二度目は主人が慌てたふうに電話をとりました。何か言い争っていたようにわたしには思えましたが」

「会話の内容は聞きとれませんでしたがか？」

「様子が変わったものですから、わたしは扉の陰で耳を澄ましていたのですが、主人も用心していたのか押し殺した声で：いまどき、そんな馬鹿なことがと、何度か口にしたのは耳にしましたが、相手は一方的にしゃべっているふうで……」

「安心して下さい。つい十分ほど前に、わたしのところに話をしたいことがあると、ご主人は電話をしてきました。わたしがご主人と会うようにし、心配事があれば何とか力にならせていただきますから」

「ありがとうございます。行先を告げずに家を出るような人ではないので、とても心配で」

「連絡がつきましたら、おうちのほうにもすぐに連絡して下さるようお伝えします」

仲条は吾平の妻をひとまず慰めたが、彼自身は不安な思いをさらに強めた。

自動車電話は発信音を告げては来ない。仲条は続いて、上市署の赤根刑事に電話を掛けた。

「お前さんたちの予測が当たってきたみたいだな」

赤根刑事には珍しく小さな声だった。

「第三の殺人の次は第四の殺人の可能性ありますよ」

「さっきの捜査会議でおれは『黒い雷鳥』と『變女轉男』のお札の魔力について、ちよっとした謎解きをしてやった。みんな疑わしい眼をしてはじめは聞き入っていたが、立山信仰の話と結びつけたら大方は興味を示したようだったぞ」

赤根刑事はちよっと得意気に言った。

「すみません。その話は次にして、緊急事態発生ということと情報をもらえませんか？イエスか、ノーだけで結構です。今度の誘拐殺人事件で、小矢部吾平は有

力容疑者にされているんですか？ 逮捕間近いとか」

「うん？ イエスかノーか。ノーだと。そんな話はない」

「それじゃ結構です。ありがとうございました。またあとで赤根刑事の話はゆっくり聞かせてもらいます」

「おいおい……」

まだ何か言いたそうな赤根刑事だったが、仲条は電話を切った。車にもどり、ハンドルを握る。

傍らの自動車電話がやたら気になったが、会社にもどる道中も、電話は無用の飾り物のままだった。

## 2

日報新聞東京本社の森中記者は、六月九日の夕刻、小矢部岳男から、自分の身柄を保護してもらいたい旨の緊急の電話を受けた。

「父から先程、お前にも危難が及ぶかも知れないからここを出ろという電話があったんです。当分、他の場所に身を隠している」と

この日は休日の土曜日で、岳男は一人住まいのワンルームマンションにいた。

この岳男からの電話を受ける前に、森中は富山支局の仲条から、小矢部吾平が不審の電話を発信してきたあと、行方知れずになっている情報を耳に入れていた。吾平の行方不明の件は、岳男自身も、千の平小屋にいる母親からの連絡を受け

知っていたことだった。

「わかった。きみの身边に何か起きるかも知れない。いまから社の車で迎えに行くよ。うちの社の独身寮に案内することにする。いいか、どんなことがあってもわたしが行くまで一歩も外に出ちゃだめだ」

森中は岳男に念押しをしてから、車の中におさまった。

岳男の住むワンルームマンションは、東京・練馬区の大泉学園町にあった。ぎりぎり埼玉県と接する町で、まだ、畑地や林などが多く残されている地だった。それだけにマンションやアパートなどの建設ラッシュも続いている新興住宅地であった。

日報新聞本社のある東京・千代田区の都心地からは、高速路を利用し、一般道に抜けて走ってもおよそ一時間半はたっぷりかかる距離だった。

社の運転手つきなので、自分で運転する煩雑さはなく、その分、車中で森中は、いま起きている事態について、頭の中を整理する時間がもてた。それらしき姿を現さなかった連中が、フィナーレでも飾るつもりか動き出した。

この機会をおれたちはじっと待っていたのだと、森中は自分に言い聞かせた。

黒い儀式の司祭者？小矢部吾平が身边の急を告げるように、千の平小屋から姿を消した？第四の犠牲者は小矢部吾平なのか？それとも、危難を訴えてきたその

子の小矢部岳男？まだ、頭の片隅には小矢部吾平も黒い司祭者の一人なのかという思いもあった。

庄川征雄、比呂あすか、そして長門雅樹、三人の死は同一犯人によって為されたとしたら？

いずれにしろ、犯人は一人ということはない。何人かの者たちが手を貸さなければ、東京、富山にわたる三つの事件は成し遂げられないはずだった。

その点で言えば、小矢部吾平にも疑いなしとは言えない。

比呂あすかの私生活を洗ううちに登場してきた者の中には代議士犬伏美千雄、そして室堂建設会長、長門蓮作の名があった。

森中は、背後について糸を操っているのは長門蓮作ではないかという先日までは考えてきた。

だが、曾孫の長門雅樹誘拐殺人事件の経過と、その顛末（てんまつ）から、長門蓮作自身も被害者側の一員に名を列ねたことで、森中のその推察はいま少し揺らいでいた。

身代金を調達する際に蓮作会長は、長男の作之介からの申し出を、きっぱりと断っている。そのことは警察の取り調べで、作之介、それに雅樹の父親の栄が蓮作は元々そのように非情な人間だと述べたてていた。

蓮作と長男の作之介の確執は以前から取り沙汰されてきたことだった。

やや病弱だったとは言え、本来なら室堂建設の仕事は長男の作之介が継ぐべきはずのものだった。

二人の間に何があったのか？

そのことは森中には計り知ることはできなかったが、次男の啓作はいまは建設業界では名を知られていた。

男に野望というものがあれば、宇奈月町でホテル経営だけに甘んじてきた長男と、中央の政界にも人脈を持ち、事業を拡大してきた次男とでは華やかさの点であまりにも大きな開きがあった。

犬伏美千雄——この建設族の富山出身の代議士が一連の殺人事件に関わっているとは、森中は考えていない。

長門蓮作、啓作につながる黒幕の男と考えるのまでが精々だった。

伏魔殿の奥にあるものまでは森中には見えてはいなかった。

うさん臭い話として存在するのは、比呂あすかが、犬伏美千雄の愛人であったろうという推測の話だけである。

もう一人、司祭者の資格を持つ者がいる。比呂あすかの母親で、真光命教の女教祖真如尼は、仲条からのレポートでは、限りなく灰色に近い存在だと言えた。

もちろん、怪しげな新興宗教の女教祖という先入観念が、森中や仲条の嗅覚を狂わせていたのかも知れないが、比呂あすかこと、野々村久美の出生の



秘密もさることながら、やはり不審な人物の一人にはちがいがなかった。

が、そんな犯人探しのパズルを森中が楽しむことができたのは、車中の時間だけのことだった。

岳男の住むワンルームマンションの建物に森中は車で直接乗り入れすることとはせず、ワンルームマンション近くにある小公園のはるか手前で、一旦、車を降りた。

すでに小矢部吾平は追われている？身だった。そうだとしたら、吾平が警告を発してきたように、岳男はすでに何者かの監視下におかれているかも知れなかった。

東京と富山黒い司祭者は、両方の地で第四のターゲットに向け、すでに殺しの矢を放っている可能性だってあった。森中の不安は的中した。夕闇に紛れて彼は忍び足で小公園に近づいた。

小公園の横手は雑木林で、人の姿はないはずなのに、すっかり昏（く）れ切ったその雑木林の入口のあたりで煙草の火が二つ、小さな赤い印になり点滅しているのを森中は眼に止めた。

近くには黒塗りの車も止められているようだった。森中は彼らから見通しの場所になる小公園には入らず、自分の車の停めてある場所にもどった。

ダイヤルをまわし、岳男に電話をした。

「…はい」

岳男は臆病な声で応じた。

「変な奴が見張っている。きみが一步でも外に出たら拉致する気かも知れん。いか、部屋の明かりはそのままにし、部屋から逃げ出して来い。小公園に出るまではきみの姿が見える位置には奴らはいない。社の車は、小公園のいちばん端の砂場の裏側に面した路地に停めてある。小公園に出たら一直線に走って、この車までたどり着くんだ。あつという間に、われわれを乗せた車は発進する。それじゃ、幸運を祈っているよ」

「わかりました。森中さんの指示に従います」

二人は脱出方法について打合わせを了えた。一分たらずののち、小公園を全速力で岳男が駆け抜けて来た。

岳男は側面の闇で、何か怒鳴り声を上げた男たちの声を聞いた。

森中は後部座席の扉を開け、岳男が走り込んで来るのを待った。

「おい、こつちだ」

森中は岳男に声を掛けた。

砂場と外の路面は低い金網で仕切られていた。その金網を岳男はよじ登り、そして、路面側に身を投げて来た。

森中が岳男をすぐさま誘導し、車の中に押し込んだ。後部扉が閉まるか閉まらないうちに、車は急発進した。

「よーし、お望みなら奴らとカーチェイスだっしてやるぞ」

と森中が勇んだ声を上げた。

彼らの車と、雑木林のある場所は距離にして五、六十メートルは離れていた。

だが、森中らに乗せた車が走り出した道は一方通行になっており、怪しげな男たちが、車のあとを追うには、一方通行の交通規則を無視するしかなかった。男たちは森中らが予測したとおり、うしろを振り返ったとき、すでにヘッドライトをこちらに向け驀進（ばくしん）していた。

明らかに、追跡車であることがわかった。

小路を森中らの車は二度、三度と曲がった。自転車が行き交う道もあったので、お互い、スピードを出すことはできない。

大泉学園通りを南下すれば、関越自動車に出ることが可能だったが、学園通りはバス路線でもあり、混雑する路線だったので、森中らは、小路を走り抜け、農道に出た。

追跡車とは距離が大きく開いた。

農道を出たすぐの場所に神社があったので、森中は運転手に命じ、車を境内の砂利道に突っ込ませた。

脇に駐車場があり何台かの車が停められていたので、その列に車を加え、すべてのランプを消した。

十数秒後、追跡車と思われる黒い車が、農道までは嗅ぎつけたらしく、車首を角地にのぞかせた。

ターゲットを見失い、一瞬、ためらっ

ている様が暗い境内から望めた。

「こちらは神だのみさ。やつらはこの場所にやって来ると神罰が下るだろうよ」

森中が言ったことばが聞こえたわけではないだろうが、結局、追跡車は首を左に振った。

農道と言っても幅四メートルはある二車線の道だった。

通過する車も皆無というのではない、「こちらがやつらの尻に尾けるか」

攻守と場所を変え、森中らに乗せた車は追跡者のテールランプを追うことになった。

「車のナンバーを確認できれば充分さ。こちらには赤外線カメラという武器もあるし」

距離を二十メートルほどとり、間に車を五、六台割り込ませてから、森中らは黒い車を追った。一台、二台と途中、脇道にそれた前の車のお蔭で、車のナンバーを撮影するとき前で邪魔しているのは一台だけとなった。

運転手が巧みに車間距離をおき、ナンバーの見やすいポジションに車を流したので、森中はがちり、黒い車のナンバーをカメラにおさめた。

あとは黒い車に用はなかった。

わざとゆっくり走り、距離を空けたあと、日報新聞社の車は、恵比寿にある独身寮を目指した。車の中で、岳男はなぜか黙りこくっていた。その岳男

の様子が、森中には気になった。

独身寮の一室に岳男を匿（かくま）ったとき、森中のほうから岳男に話し掛けた。

「何か元気がないよ。もちろんお父さんのことを心配しているんだろうが」

「実は親父は電話を掛けて来たとき、わたしは過去に重大なミスをして人を殺したと言いました」

「重大なミスを…人を殺した？」

森中はことばを呑んだ。

「それが…黒部の人柱伝説の話は、ほんとうにあったことで、わたしはその秘密を知る一人だとも」

岳男は小さく声をふるわせた。

「真説黒部の人柱伝説か、やはり…。三十数年前に何があったのか？いや、昔のことではなく、いまもその伝説は生きている。すでに三人の犠牲者が出て、そして、四人目の命がいま狙われようとしている」

「それが親父か、それともこのぼくだというわけですか？」

「その可能性はある。実際にきみを見つけ狙った者がいた」

「ぼくが救かるということは、親父の命が…」

「悪いほうにばかり考えないほうがいい」「誰が、誰が親父の命を？」

「これはあくまでも仮説だが、三十数年前、黒部ダムでほんとうに人柱が捧げられたとしたら、そのときに、それを主宰

した者たちの間に、何か密約のようなものが、あったのじゃないか」

「密約ですか？」

「『黒い雷鳥』と『變女轉男』の黒い魔符が庄川征雄、比呂あすか、そして今度の長門雅樹の三人の遺体発見現場からは発見されている。なぜ、わざと人目につくこのような魔符を用いたのか、ふつうの犯罪者心理とはちがう面があることに注目すべきだとわたしは思っている」

「親父が過去に重大なミスをして人を殺した？これは？」

「もちろんお父さんの口からきき出す他はないが黒部ダム建設にお父さんも工夫として加わっておられた。人身事故が度重なり多くの人命が失われた。重大なミスとは事故にお父さんも関わったことがあるということじゃないか。あくまで推測ではあるが」

森中の説明に一応岳男は納得したが、しばらく視線を宙に泳がせたあと、決意をしたように、岳男は胸中に秘めていたことを、森中にぶつけてきた。

「人柱伝説と魔符、そのことと関係のあることかも知れませんが、ぼくは、毎年、四月二十一日の夜になると奇妙な夢を見るんです……」

と、岳男は話を切り出した。

森中が吾平から聞かされている話より、内容は魔物めいたものだった。

風の立った水面が切りもみ状態になり、自分の体も、木っ葉のように水の

柱に呑み込まれ、魔の湖底に引きずり込まれていく夢のことだった。

そして、やがて、岳男は死の世界にでも身をおいているのか、第三者の眼を持つ存在物になり、湖面に舞う四つの青白い鬼火を見る。

彼自身が引きずり込まれた波の柱は、東西南北の方角に一つずつあるらしく、四本の竜巻状の白い波柱が吹き出す。四匹の鬼が舞っている様が見えることもあった。

「同じような話をお父さんにわたしも聞かされたうちの一人ですからね。きっと、あなたは感受性が強いから、毎年同じような夢を」

岳男の話を全部聞いてから森中が、自分なりの注釈を加えた。

「でも、なぜ、四月二十一日なのか、そのことが」

「四月二十一日になるとまた夢を見ると考えることが暗示になる？」

と一応のところ森中は精神的な負担を軽くさせるためにことばを加えた。

が、森中は、一つだけ、心当たりがあった。四月二十一日という日が特別の意味を持つ日ではなかったかと……。

（たしか、三十数年前、千の平小屋の初代の主であった岩垂六助は四月二十一日に黒部湖に身を投げ死んだはずだった）

この記憶が森中の頭の中に残っていたのは、偶然のことだったが、彼が十

四歳の時に夭折した母親の命日とその日が重なっていたからであった。

（岩垂六助が入水自殺した件は謎に包まれたままで、小矢部吾平もこのことには触れたがらなかった）

岳男にこの話をするのは森中としては気が引けた。恐怖話をもう一つ、岳男の頭の中に浸み込ませてしまうことになる。ともかくも森中は、この夜は慰め顔で、岳男の話を聞いてやる側にまわった。

3

『昭和三十二年六月三日、黒部湖の地底に、四人の人柱が建てられた。わたしはこの事実をいま明らかにする』

この文句で始まる驚くべき告白文が小矢部吾平から、仲条記者に送られてきた。

便箋用紙に三枚分に、走り書きされたもので、封書の投函日は六月十日になつており、差し出し郵便局のスタンブは扇沢になつていた。

仲条はこの速達文を翌十一日の午後十時頃手にした。それまで彼は取材活動が続けていたのだ。

仲条は、手紙を持つ手がふるえた。

真説黒部人柱伝説の一部が、便箋用紙には記されていたからだ。

『昭和三十二年五月一日、関電二号トンネル、第七十一号枝杭で大破砕地帯に遭



遇、切端（せっぱ）の鉄棒を押し潰し、地中の軟弱層が一挙に噴出した。水圧は一平方メートル四十二キロという凄まじさで、この日、一度に三十四名の犠牲者を出す惨事となった。

工事関係者は憂色に包まれ、人類史上に残る難事業に挑んでいた全員が自然の計り知れない猛威に、おののき震えた。

泥流の彼方に押し流され、地中深く閉じ込められた人柱は、さながらに、立山の山の神々が、神の領域を人間が破壊しつくすことへの代償を求めたかのようなだった。水勢はなお増し、翌二日、三日にも、破碎現場の修復に赴いた工事関係者が、新たな破碎地帯に遭遇、八名が泥土の底に呑み込まれた。

春を告げる雷が、立山の峰々をつん裂くように走り、外ではこの季節には珍しく轟雨が降り続いた。

まだ人が手をつけていないダム基礎河床部予定地周辺の雪の山々に、大規模な泡なだれが発生、一部の山の麓は、その形を粉碎され、人が手を加える前に崩落の状態を示した。

神の怒りそのものがあらわされ、現地に入っていたヘリコプターも雪に呑まれ、犠牲者が二名出た。また立山ルート木馬道を建設中の作業員も、沢の鉄砲水に打たれ、七名が貴い命を失った。このとき、立山の雷神に、人身御供の儀式を願い出た者がいた。

黒部湖の湖底に四人の人柱を捧げることを彼らは誓ったのだ。

その彼らが誰であるかは、わたしはここに記すことはできない。

四人の人柱を捧げた、彼らは、立山の雷神に祈った。白分たちの血累（けつるい）、あるいは関係者などを、のちのちの世の人柱の儀式の際には、必ず神に捧げますと。

わたしもそのうちの一人になる可能性がある。庄川征雄、比呂あすかこと野々村久美、そして長門雅樹、三十数年前に誓ったことが、いま、ほんとうに実行に移されようとしているならば……』

仲条は小矢部吾平が明らかにした黒部湖に建てられた四人の人柱が誰であるかは推察できなかったが、吾平の文面から、今度の一連の殺人事件が、三十数年前に行われたという黒い儀式に由縁のある者たちであることを知った。

同時に、首なし死体で三人が発見されていること、魔符の存在から、まぢがいなく、立山の雷神に誓ったという血累の者たちが、殺人事件に巻き込まれているのだという確信を持った。

手紙を読み了え、封書の裏を何気なく見たとき仲条は別の信号文を眼にした。『東京に行く』と鉛筆書きの文字が記してあった。仲条は、この事態を伝えるべく、東京の森中に電話をした。

回り回って、日報新聞の独身寮の一

室に電話はつながった。

仲条は全文を森中に読み聞かせた。仲条自身が興奮している様は森中にも伝わったようだった。

「いま、岳男さんからも真説黒部人柱伝説の話がお父さんから一部電話で伝えられてきたのを聞いたばかりだ。いま聞かされた手紙の内容で、そのことが一層明確になった。それにしてもショッキングな内容だな。大スクープになるがいまは浮かれてばかりはいられないぞ。われわれのいまの使命は、黒い司祭者が誰かを突き止めることにあるんだからな。このことには人命もかかっている」

二人はこれからのとるべき手段について、意見を交換した。

「現実には三人の犠牲者が出、四人目の犠牲者も考えられるいま、記者風情の力だけでは限界があります。小矢部吾平さん失践事件に関しては警察の力を借りようと、ぼくはいま思っています」

「そちらは赤根刑事の出番だな。よろしく伝えてくれ」

「わかりました。ここいらで一つ赤根刑事にこれまでの借りを返さなければ」

仲条のことばに森中も同意した。

仲条は赤根刑事に連絡し、会う約束をとりつけた。国道八号線沿いにある二十四時間営業のドライブインで三十分後二人は会った。

赤根刑事はもう腕の負傷のほうは、ほぼ良くなり、第一線復帰も間近のようだ

った。

「いきなり、三十数年前の話をつきつけられてもな。それにしても、人柱が建てられたとは穏やかじゃない」

仲条が差し出した吾平からの手紙に眼を通しながら赤根刑事が言った。

次第に赤根刑事の眼が鋭くなった。

全文を読み了えてから赤根刑事は「うーむ」

と一声うなった。

「事件の全容が見えてきましたよ。過去の話にまでスポットライトが当たってきました」

仲条は急き込んだ口調になった。

赤根刑事は、煙草をとり出すと、ゆっくりとした仕種で火をつけ、一服、深々と喫（す）った。

「どうです？犯人像は…」

やはり仲条は早口になった。

「相変わらずブン屋さんは、功名を急ぐほうだな。こういうことは急いではことを仕損じるんだ。まず、頭の中を一度空っぽにし、雑念を払い去ることが必要なんだ。いま何をなすべきか。現実のことに頭を向けなくちゃな」

「その人柱の話と、失踪話はまちがいに  
く関係のあることでしよう。慌てるなと  
おっしゃいますが、小矢部吾平は第四の  
犠牲者になる可能性が大なんです」

仲条は自分のペースでものを言った。

「もちろん、現実のこととは小矢部吾平の足取りを追うことだ。ともかく、千の

平小屋を脱出し、関電のトロリーバスに乗って、扇沢まで彼は出た。そこで手紙を投函した。この間の小矢部吾平は一人で行動していると考えるべきだろう。だいいち、この長文の手紙、予め用意していたのかも知れないが、失踪途中で書いたものだとしたら時間の余裕はあったことになる」

赤根刑事は落ち着いた声で、そう説明した。

「問題は小矢部さんが第四の犠牲者になる可能性があるということでしょう。何度も言いますが」

「身の危険を感じて小矢部吾平は千の平小屋を出た。本来なら警察に保護を申し出ればいいところだが。単独行動を彼自身がとっているのはまず間違いないだろう」

そう前置きし赤根刑事は吾平の足取りを追った。黒部湖から扇沢までは、山越えでもしない限り、人目につかずに到着する方法はない。

赤沢岳の中腹を貫く関電トンネル内は一般車の通行は禁止されており、小矢部吾平は関電が運行しているトロリーバスの客になって扇沢に出た可能性が大であった。

赤根刑事の説どおり、手紙には十日のスタンプ印があるのだから、時間的に考えても、トロリーバスに乗ったのはまずまちがいないことだった。

一人で行動していたか、誰かに見張

られてのことかは断定は出来なかったが、手紙を出す時間があったことは、一人になる時間を持てたということだから、この場合、赤根刑事の言う単独行動説を仲条も支持した。

「しかし、ぼくのところに小矢部さんが電話をして来たときは、かなり切迫した感じでした」

「誰かに後を付けられていたかも知れない。ま、そのことはいま論じても仕方がないことだろう。まず、小矢部吾平の身の安全を図る方法が一つ、それから、きみとも話し合ってきた第四の殺人の可能性があるのだとするなら、犯人像をさらに絞り込み、警察の側も行動を起こすことの二つの点がいまの最優先課題になる」

「東京の森中記者はすでに、小矢部岳男を保護しています。その点についてはどう考えますか？」

仲条は、赤根刑事に、岳男のところに父親の吾平から身の危険を知らされたこと、そのあと、岳男を保護するとき、怪しげな連中が岳男のあとを追おうとした事実はすでに伝えていた。

「警視庁はそれだけでは動かんだろうな。比呂あすか殺人事件との直接の関連性が見つけ出せれば、そちらの捜査スタッフがのり出してくるかも知れんが、少々無理がある。ともかく、小矢部岳男は、相手には知られていない場所に保護されてるのだから、さし迫っ

ての危険はない。そちらは、森中くんに任せるしかないだろう」

「もう一つ新事実があるのですが」

仲条は上衣の内ポケットから一枚のメモを取り出した。

森中から、仲条は東京での岳男保護に関連して別の確認情報を得ていた。

「小矢部岳男を追った連中ですが、車のナンバーから割り出したところ、車の持ち主は、右翼系の暴力団として知られる統正会の松並藤吉。この松並藤吉ですが、比呂あすか殺人事件のとき、森中記者が比呂あすかの住むマンションに事件の前後出入りした車の中に、やはり、松並藤吉の経営している松並不動産所有の車がありました」

「なるほど、警視庁がそれだけの捜査資料を持っていれば比呂あすか殺人事件に関連性ありと判断したかも知れないな。小矢部岳男の脱出劇についても、しかし、ブン屋さん先行型、警視庁も面子（めんつ）があるから、富山県警から日報新聞の得た情報を提供しても、そちらの捜索は、まず無理だろうな」

「黒部人柱伝説：こちらの話は前々から、ぼくにしろ、森中さんにしろ、小矢部さんから創作話として、部分的には聞かされていたんです。いま思えば、小矢部さんは、真実話を胸の内にしまい込んでおくのが、心苦しくて、それらしい創作話を口にしたのでしょう

ね」

ふーと一息、仲条は吐息をついた。

そして、小矢部吾平が語った創作だとされる黒部人柱伝説のさわりの部分だけを、仲条は赤根刑事にあらためて口にした。

「そちらの真実話は、いずれ明らかになるだろう。誰と誰が関係していたのか？そして、当時の関係者のうち、なお、生存している者がいるのかどうか。日報新聞社は世紀のスクープというやつを射程距離においていることになるな」

「やっと、あわてる乞食はもらいが少ないという赤根刑事の説が正しいことが、ぼくにもわかってきました」

「それぞれ。むだにおれは人間を長くやっていない。さてと」

赤根刑事は言い、頭の中を整理するためか、再び煙草を深く喫い込んだ。

「おれと仲条記者は何をするかだ。東京の動きは森中くんに任せて、われわれは、こちらで着実な捜査体制、いや、きみの立場から言えば取材体制か、そいつを固めておかないとな」

二人が対峙（たいじ）したテーブルの上におかれたコーヒーマシンは手をつけなかったので、冷えかかっていた。

「雅樹くんの父親、栄さん、それに祖父の作之介さん、こちらはやはり、被害者と考えるべきなんでしょうか？」

「うん、その件だが、先日開かれた庄川征雄、長門雅樹両殺人事件の合同捜



査会議では、あくまで長門作之介と栄・奈美子夫妻は被害者ということで見が一致している。ただし、室堂建設会長の長門蓮作、杜長の啓作については、長門雅樹誘拐事件で、二人が積極的な意味で必ずしも、作之介や栄夫妻に対して協力的ではなかったという事実は指摘されたようだが」

「と言って、長門蓮作、啓作に対して直接の嫌疑のかかるものは何もありません。この小矢部さんの手紙が長門一族も当時の関係者ではないかと語っているだけです。ただ、さつき話をしたことですが、室堂建設と、松並不動産、つまり、統正会とは森中記者の調べでは地上げなども通じ関係が深く、また、室堂建設のバックについている犬伏代議士も、統正会とは浅からぬ縁、それから、ここが一つ、大きなポイントだと思うのですが、黒部ダム建設に関わって室堂建設は大きく成長した。当然、犬伏美千雄現代議士や、亡くなった父親の犬伏千太郎代議士も、黒部ダム建設の恩恵を受けた連中の一人とすることになります」

「きみの言いたいのは、その連中が、黒部ダムで人柱を建てた……ということだろう。話は飛躍しているが、その可能性はあるな」

「その話は追い追い詰めるとして、もう一人、ぼくの頭の中には不審の人物がいま  
す」

「女教祖、真如尼、本名野々村芳子か」

と、赤根刑事は仲条の話を取引きし答えた。

「あくまで、今度の三つの殺人事件は同一犯人という前提に立ち、かつ、首なし死体という異常性、それにまがまがしい魔符の存在から、黒い司祭者がいると断定した上での考えになりますか」

「一応、その考えを支持しよう。それから、第四の犠牲者に、小矢部吾平が指名されたという考えもわたしは採るよ。失踪したことに加え、はじめに見せられた黒部湖の地底に四人の人柱が埋められた」という手紙の内容も、小矢部吾平が一連の殺人事件に関連して第四の犠牲者に選ばれたことを暗示しているように思う。首のない死体？もしかすると死者の首は、四という数字から考えて、新たな人柱にされようとしているのかも知れない」

「四人目が小矢部吾平だとしたら、その殺人行為は絶対に止めさせなければ」

「息子の岳男の命を狙っている？たぶん、これは父親が、犯人どもの手からのがれた場合を考えての次善の策ではないか」

赤根刑事の推理は冴え渡ってきた。

それから赤根刑事は腕組みし、しばし、考えるための時間をとった。

「手紙にもあったが、これまで起きた三つの殺人事件は、三十数年前に行われたという黒部の人柱の話と、どこかで一つ

につながっているらしいな。当時の関係者と、その血縁者たち、三十数年前に何があったかは知らんが、長門蓮作は工事関係者、庄川征雄も、小矢部吾平も、黒部ダム建設で工夫として働いた経験を持つ、そして長門雅樹は蓮作の血縁者、比呂あすかこと野々村久美の出生の秘密もまだ明らかにされたわけじゃない。認知者は山崎誠一郎になっているが、長門家の誰かとの間に生まれた子なのかも知れない」

「それで、野々村芳子？」

仲条は勢い込んでたずねた。

赤根刑事の論理は小気味よく、仲条の耳に響いていた。

事件の絡みについて糸を手繰り寄せていた。森中と仲条のまだ覚束ない推理に、赤根刑事は明快な答えを引き出したようだった。

「黒い司祭者は、たぶん、野々村芳子だ。いや、その祭りを執り行う女神主といったところだろう。四つの人柱が揃えば、真光命教々祖、真如尼は、大町の教団本部を離れるのではないか？きみのところに、小矢部吾平は東京に行くとか封書の表書きに記し知らせてきた。野々村芳子と小矢部吾平につながりがあれば、二人共、東京に行く可能性はありだ」

「と言うことは、小矢部吾平は教団本部を訪れた可能性も大ですか？」

「小矢部吾平単独行動説をわたしはとる」

「

「小矢部吾平は扇沢から長野・大町に出た。その間の所要時間は三、四時間程度ですよ」

「教団本部に行くのは、野々村芳子が犯人側ならという前提に立ってのことだが、わざわざ、小矢部吾平は捕まりに行くようなものじゃないのか。だったら彼は失踪したりしないよ。潔く、初めから、自分の命を狙った者に、命を預けたんじゃないか。彼は、黒部ダム建設に関わる人柱の事実を世に公表すると、きみのところに手紙を寄せてきた。逃げさせて、自分の思いをいまは遂げようとしているのではないか？」

「でも小矢部吾平が逃げ了れば、次の犠牲者のターゲットは息子の岳男ということに？」

「よし、こんな場所で時間を潰している暇はないぞ。長野県警に依頼して、野々村芳子の挙動を見張ってもらおうよう手配しよう。わたしはどうも、野々村芳子が動き出すような気がしてならない」

「動き出したらわれわれにチャンスがあるかも知れませんか」

仲条が力強く言い、赤根刑事が同時に席を立った。

二人は顔を見合わせ、大きく頷き合った。

送られてきた真説黒部の人柱に関する話の文面を読み、大いに興奮した。

いま二人を乗せた日報新聞の車は夜の闇が垂れ込めている時間、東京・西新宿にある松並不動産ビルに向かっていった。

六月十一日の午後十一時過ぎの時刻のことだった。

「創作話だと思っていたら、黒部人柱伝説は事実の様相を帯びてきた。しかも、闇の中で蠢（うごめ）いている者たちの姿が、朧（おぼろ）げながら見えてきた」

「朧げじゃないわ。もうはつきりと見えてきたんじゃないの？」

「創作話は創られた部分もあるだろう。しかし、現実にかけている三つの首なし殺人事件は、われわれが現実に遭遇している事件だよ。三十数年前にあったとされる黒部湖の人柱の話については、生き証人がいてはじめて証明されることさ」

「その生き証人は小矢部吾平」

「しかし、彼は失踪し、いま、身の危険にさらされている。生き証人をわれわれの手で確保するのがまず先さ」

「でも松並不動産に向かっていているのって、どうして？小矢部岳男を拉致しようとした連中が暴力団 統正会だとしても、殴り込みに行くわけじゃなし」

「怪しげ情報を手に入れたのさ。不審の車が松並不動産の駐車場に停められてい

るって。あの近くのビジネスホテルにたまたま泊まったうちの記者の一人がおれに教えてくれた」

「不審の車？」

「大型冷凍車が一台、しかも、その車のナンバーは富山ナンバーでさ。富山富山と騒いでいるおれに、そっと耳打ちしてくれただ。不動産屋に冷凍車、妙な取り合わせですよって言われたとき、おれにはひらめくものがあつた」

「そう、かっこつけないで、ずばりと、言いなさいよ」

「まず、絡みの糸から説明しようか」

車のハンドルを握っている森中だったが、話のほうに夢中になった。

「第一に登場してくるのが代議士の犬伏美千雄さ。地元富山の魚津市にやつは富山水産という魚仲介商の看板を持つ会社を弟にやらせている。犬伏美千雄と松並不動産は三、四年前から目立ち始めた地上げの仕事でもつるんで相当、悪疎なことをやった。その土地転がしには室堂建設が大低顔を出す。地上げをしたあとの地に建つビルの建築を室堂建築が請け負うという構図だ」

「わかったわ。小矢部吾平が送って来た手紙に登場する者の名に、長門雅樹の名前がある。庄川征雄、比呂あすかについては、いま、森中さんの言った連中とは、直接の関連性はないけど、何かそこには秘密が隠されている？」

「小矢部吾平の過去の秘密同様にね」車

は新宿の街に入っていた。

一日が終わろうという時間なのに、新宿の街は車も人の数もまだまだ多かった。西新宿はいま新しいビルがいくつも建っている。高層ビルの建ち並ぶ地域はホテルや賃貸しビルで、すっかり街の様相が変わった。

二十数年前までは淀橋浄水場などもあり、西新宿は静かな街で、住宅地も多くあった。いまはその昔日の面影を知る者も少なくなっている。

いまも、地上げの跡を残しているのは旧住宅地であったところで、ところどころに、空所があり、板塀や有刺鉄線で囲まれた地があった。

その一角に、松並不動産の四階建てビルがあった。古い建物で目立たなかったが、このあたりの地上げには実績を持っており、金庫には大金が転がり込んだはずだった。

森中と千香子は手前の空地横に車を停め、降りると、アベックよろしく腕を組み歩き始めた。

松並不動産のビルの上階には二つ三つ明かりがついていた。右翼系暴力団統正会の事務所も、このビルの上階にある。

二人はビルに近づき、様子を窺った。

駐車場は仮のもので、ビルの入口横に、五、六台の車の止められる空地があった。駐車場に入らずとも、大型冷凍車は、その図体の大きさのためにすぐに確認できた。

「待ってる。おれはやつらの面にシヨンベンでも引っ掛けてくるよ」

森中は質の悪いジョークを残し、千香子との腕を解くと、駐車場に入って行った。

森中は人の眼を意識し、ゆっくりと歩き、冷凍車に近づいた。

まず、富山ナンバーを確認した。

次に保冷库の車体に記されているのはずの会社名を森中はたしかめにかかった。

街灯の明かりがとどいているだけだったが、都心地の夜空の反射光はかなり明るく、冷凍車の車体の様子をたしかめることは充分に可能だった。

（やっぱりな。何か仕掛けがありそうだな）森中はひとり呟いた。

車体には会社名が記されているはずなのに車体と同じ銀ねずみ色のペンキで、会社名の記されている部分は塗り潰されていた。逆の側にまわり、また、運転席扉の部分もたしかめたが、会社名は見当たらなかった。

このとき、階段口が、入口のすぐ横についたビルから、数人の者の靴音が聞こえてきた。

エレベーターもないビルなので、上階からそれらの者たちは降りて来たようだった。森中がビルの上階を見上げると、さつき灯いていた明かりが一つ消えていた。予め、人の気配があったときに身を隠そうと考えていた空地隅の簡易ゴミ焼却炉の陰に、森中は素早く身を隠した。



男たちが三人、駐車場に姿を現した。パンチパーマの男もまじっており、暴力団正会の連中に森中は見えた。

「まったくでっけえお荷物さ。いいかげん、出勤命令が出ないとな」

「都心のまん中に墓場か。ま、さらし首じゃないだけ救かるがな」

「おい、めったなこと言うもんじゃねえ。午前二時になると、あの冷凍車から幽霊が出るって話もあるぜ」

男たちは軽い口調で言い、一台の車に乗り込むと、この場を去った。

（さらし首？幽霊が出る？いや、もつと大事なこともしゃべりやがった。出勤命令が出る？）

のっそりとゴミ焼却炉の陰から姿を現した森中は、やはり、富山ナンバーの無用の冷凍車がいわくつきのものがあることを、図らずも知った。

今度は急ぎ足で駐車場を出、千香子の姿を探した。

「こちらよ」

千香子が、草が生えた地上げの土地の一角から顔を出す。

車の中にもどると、早速、森中は助手席の千香子に男たちが不用意に残した会話の内容を伝えた。

「話は、比呂あすか殺人事件のときからつながっているよね。松並不動産所有の車のナンバーをわたしと一緒に仕事をしていたカメラマンがネガにおさめた。話は堂々めぐりしていたみたいだけど、

望遠レンズの焦点がどうやら絞られてきたみたい」

千香子は少し得意げに、鼻をうごめかせた。

「冷凍車、何だか不気味だな。ともかくやつらの口吻りだと、あの冷凍車、近く出勤の予定らしいな。何のためにだ？」

「わたし、考えたくない。いま、怖ろしいことがわたしの頭の中を横切ったわ」

「おれもだ。口にしたくないことさ」

「それじゃ、二人が考えていることはきっと同じよ」

「黒い儀式のために、あの冷凍車は動き出す。あの車を見張っていれば、そして行く先をつき止めれば、闇の中で蠢いていたものたちが、一堂に顔を合わすんじゃないか」

これから自分たちがとるべき行動について森中が言及した。

「第四の犠牲者になるかも知れない小矢部吾平についてはどうするの？」

「いま現在の状況を言えば、探しようがないというのが本音さ。どうも、おれは黒い儀式の場は東京のどこかの地と言う気がしてならない。室堂建設は、例の凝固剤の手抜き工事で、ここ半年の間に、二つの大きな事故を起こしている。黒部ダムで人柱を神に捧げた黒い司祭者が、室堂建設の長門蓮作だとしたら、地の神にまた生贄を捧げる

話は充分に有り得る話さ」

「小矢部吾平は失踪したあと、東京に向かっているってこと？」

「自分が息子の身代わりになる気ならな」

「わたしたちが黒い儀式の現場を見つげ出す前に、小矢部吾平は殺されてしまうかも知れないのよ」

「無事を願うしかない。ともかく仲条からの連絡では彼は逃げのびたんだ。白文も送ってきた。東京に来ているなら絶対におれのところに連絡がある。」

お互い、山の仲間同士だったんだ」

「そうね。いまはそのことを願うしかないみたい」

千香子も何かに祈るような眼つきになった。

5

長野大町市の霊松寺山の麓にある真光命教本部から六月十二日の朝、一台の高級車、BMWアルピナBが発進した。三六〇馬力のこの高級車は二千万円はする代物である。

富山県警上市署の赤根刑事は、腕の負傷のほうもほどよくなり、第一線に復帰した。

覆面パトカーが、直ちに、アルピナBのナンバープレートをキャッチ、各所に追跡の網を張った。それでなくとも、あたりを払う最高級車、車のボディに金色

のメタリツクな横線の装飾がほどこしてあるので、いやでも人目につく。

赤根刑事の上市署のチームは、アルピナBとは大きく距離をおき追跡した。日報新聞富山支局の仲条記者はその上市署チームの車のあとにつけた。

すでにアルピナBの乗員については、追跡班は確認していた。

女教祖の真如尼こと野々村芳子と、いつか、仲条記者が教団を訪ねたときに応対に出た耳の大きな特異な面相の老人が同乗した。

運転手付きのアルピナBは、真光命教の幹部二人を後部座席に呑み込んだ。仲条ははじめアルピナBのあとをつけたとき、不吉な思いに捕われた。

車の中に、小矢部吾平の姿がなかったからである。もしかして吾平はずでに殺害され、アルピナBの後部トランクに詰め込まれているのではないかと、つい、仲条は悪いほうに物事を考えってしまったのだ。

『東京に行く』と封書の裏に、あとからつけ加えられていたことで、仲条は吾平の単独行動に望みをつないでいたが、それでも、やはり、不安な思いは消せずにはいたのである。

赤根刑事と追跡行の途次、打ち合わせをしたとき、赤根刑事は、

「車内にいればことはかんたんに片付いたのにな。絶対にアルピナ野郎のがさない。小矢部吾平は無事保護という段

取りになったものを」

と口惜しがった。

二人とも、すでに小矢部吾平は殺されているのではと余計な心配もするこ  
とになった。

東京本社森中記者からは、松並不動産の駐車場に停められているという不審の富山ナンバーの冷凍車の情報は、二人とも入手済みであった。

誰も長門雅樹の首なし死体が発見された前日の夜、富山・魚津市の漁港内から一台の冷凍車が二人の男を乗せ、闇に紛れて魚津の港から消えたことは知らない。

だが、赤根刑事も仲条記者も、アルピナBが中央自動章道に入ったとき、何台もの冷凍車を視野の内に入れたことで、嫌な思いに捉われていた。

森中記者が、冷凍車の存在に感じたと同じように、二人も行き過ぎ、擦れちがう冷凍車を見て、ついつい、考えたくないことを考えてしまった。

三人の首が殺人現場から消えている？その首はどこにあるのか？

やはり、赤根刑事も仲条記者も、口に出すことは憚（はばから）れ、お互い、そのことには触れなかった。

冷凍車は恰好の保存場所になるそのことが、ちちらと二人の頭を掠めたのだったが、話題にするのは避けたのだ。その分、冷凍車を見ると、嫌な思いが反復してやって来、ついつい、二人

は冷凍車から眼をそらしてしまったのだった。

富山県警から東京警視庁にも、アルピナBの追跡網を広げるための連絡が、上部機関により伝達されていた。

大町から国道四七号線を経て、長野自動車道を経由、アルピナBは中央高速道に入った。

一路、東京を目指す。

三時間四十分後、アルピナBは、中央高速道から西新宿近くの初台ランプを降りた。

追跡部隊が想定した通りの道順を通り、都内に入ったアルピナBは、車首をさらに海側の方向にとった。

湾岸道路を目指すとなれば、臨海副都心地区が最終目標地点かも知れなかった。

一方、西新宿の松並不動産の駐車場近くの路上に車を止め、不審の冷凍車を見張っていた森中・千香子のチームは、午後十時五八分、冷凍車が西新宿から移動を開始したのを確認した。

アルピナBから、西新宿の松並不動産ビル内の暴力団統正会に連絡がとどけられたのか、ほぼ、アルピナBの新宿入りと時を同じくして、冷凍車は駐車場から出ていた。

あとは二台の車が、どこで合流するかを見つけ出すだけだった。

午後十一時三分、森中の運転している車の自動車電話に、小矢部岳男から

緊急の電話が入った。

岳男も同行を願い出たが、森中が身の危険性と、もう一つ、父親の吾平からの連絡が岳男宛てに入る可能性もあると考えたことから、恵比寿の日報新聞社の独身寮に残した。

身柄を保護されて以来、岳男は金子健設のほうは病気を理由に三日間欠勤、していた。

「森中さん、たったいま父から電話がありました。わたしも人柱になる運命だ。いまからわたしは三十数年前に黒部ダムに人柱を捧げた連中に会いに行く。わたしが人柱にならなければ、お前が身を隠したことで、犬伏美千雄が愛人に生ませた十五歳の少年の首が、神に捧げられることになっていると言いました。過去を言えば、わたしには罪はあるが、その少年にはない。だからわたしはいまから、すすんで、人柱になると」

「それで、いまどこにいると？」

「おなじ東京にいるが、その場所は言えないと父は……」

「あとは？」

「それだけです。ぼくにさようならと告げ、電話を切りました」

「わかった。いまアルピナと冷凍車は新宿の街を通過中だ。できることなら合流させずに、どちらかの車を先に目的地に着かせ、黒い儀式が始まる前に、何とかお父さんの身柄を保護する方法をとることにするよ。二台の車は目的地で落ち

合わない限り、黒い儀式は始まらないはずだ」

そう告げ、森中は電話を切った。

すぐに、赤根刑事の乗っている車に、携帯用の無線電話で、岳男からの電話の内容を、森中は伝えた。赤根刑事は張りのある声を返してきた。

「新たな犠牲者は十五歳の少年なの？相手は小矢部吾平が司祭会場に着かないとその少年を殺す気なんだわ」

と怒りを、千香子が露わにした。

「と言うことは、小矢部吾平は逃げたあと、一度は相手側に連絡をしたということかな。この愚拳を止めさせるために」

「そうかも知れない。四番目が小矢部吾平、五番目が小矢部岳男、そして六番目に彼らは犠牲者として十五歳の少年を指名したんだわ」

「なるほど、恐らくそういうことだろうな。それで、小矢部吾平は心理的に追い込まれた」

千香子の見解を受け、森中はいま展開されている追跡行のストーリーを読んだ。

「わたしは、あなたに命じられた日時に、指定された場所にまいります。どこへも逃げたりはしません」

公衆電話ボックスの中で受話器を握り締めていたのは、小矢部吾平だった。



「当たり前だ。お前はよもや三十数年前のあの阿鼻叫喚（あびきようかん）の地獄のさまを忘れてはいないだろうな。あのときの事情がどのようなものであれ、お前も黒い雷神様の御下命を受けた一人だ。同じ血累の息子をあのときの誓いどおりに、神に捧げぬなら、お前自身がその身に成り代わる他はなかるう」

相手の男の声は嘎（しゃが）れ声だった。有無を言わせぬ威圧力がことばの端々に込められていた。

「庄川征雄が殺され、野々村久美が……それにあなたは」

「そんな御託（ごたく）は聞きたくもない。わしは、雷神様のご威光を、いま再び、お借りせねばならぬ立場に立たされておる。それにこの齢だ。息のあるうちに、三十数年前にお誓い申し上げたことをこの手で執り行わねば、あの世に行つてわしは地獄に墮ちるでな」

「立山の山々に還るとすれば、あなたは地獄界に元々墮ちねばならぬお人でしょうが」

「はは、笑わせるでない。四人の人柱を建てたことで、わが社は隆盛の運に恵まれ、わがニッポン国は、世界も眼を瞠（みは）る経済大発展を遂げたのじゃよ。みんな雷神様のお蔭ではないか」

「ですが、いまは」

「何が科学万能の世の中だ。秘儀を執り行うたからこそ、黒部ダムは無事完成し、山の神様も怒りを鎮め給うたのだ」

男は自ら神の名を名乗っているかのようだった。

「ともかく、わたしの身代わりに、あなたの邸に待機させているという少年の命だけは、保障して下さい。そのためにわたしは」

「ほんとうは警察にでもわしを売る気だったのだろう。お前は罪はないというかも知れんが、心の罪は死ぬまで消えはせん。いやいや、お前の御託どおり、お前もまた地獄に堕ちる身であろうが。その上、誓いごとを守らねば、十五歳の少年の素っ首が飛ぶ。いいな。必ず、わたしの前に姿を見せよ」

「わかっています。それではいまから」  
「ああ、お前が来なくても儀式は執り行われる。だが、どんなことがあるかと、お前を探し出してわしらは殺す。そう、息子の岳男もだ。神に背いた者が受ける罰じゃ、いいな」

男は宣告すると、電話を切った。

小矢部吾平は、公衆電話ボックスの中でしばらく佇（たたず）んでいたが、外から利用客の一人に扉を叩かれ、われに返った。人込みに紛れ、吾平は舗道をいた。彼のいる場所は、東京駅の近くだった。扇沢、大町、長野を経由して東京・新宿へ列車で出たあと、JRに乗り継いで東京駅で、彼はさつき降り立ったところだった。

小矢部吾平が、三十数年前に経験した阿鼻叫喚の地獄とは……。

そのことを、また思い出したことで、吾

平の足取りは重くなった。

昭和三十一年七月に着手された黒部川第四発電所の建設工事に、二十代前半ばの齡だった吾平は一工夫として参加した。

そもそも『黒四（くろよん）』建設の夢は大正時代から始まっており、測量調査は、宇奈月から「下の廊下」をさかのぼるルート。大町から針の木峠を越すルート。室堂から東一の沢を下るルート。これらの三つのコースで、すでに、開始されていた。世紀の黒部ダム工事は、いまもって日本では最大の難工事だったと語り草にされている。

吾平は危険度も高く、体力も要する赤沢岳中腹を貫通するチームに加わった。

労賃もその分高く、若かった吾平は危険覚悟で請負い、ジャンボと名付けられた強力掘削機を手に、岩穴を穿つ作業に従事した。

作業開始時から、すでに、切端作業の不充分さによる落盤事故や、資材運搬時のミスなどで、犠牲者が出た。

そして翌三十二年五月一日。山の神が怒りを示した。

赤沢岳地中の軟弱層に突き当たった第一線作業班は、岩盤の崩落事故に遭遇。

凄まじい勢いの水流が一拳に吐き出され、鉄棒の切端を押し曲げ、たちまちトンネル内を濁流の道に変えた。

地層内に貯えられていた摂氏四度の水は、実に水圧一平方センチ当たり四十二キロの暴発力を有し、このとき、瞬時にして三十四名の第一線作業員が、濁流に

呑まれ、どこに続くとも知れぬ地下水の闇の穴の奥にと消え去った。

この突出事故はその後も何回か続き、工事はその都度中止の憂目を見た。そんなパニック状態が続いたある日のことであつた。小矢部吾平は、神からの魔の囁き声を聞いた。

いや、吾平が望んだことではなかつたが、彼は黒い儀式の一員にいつの間にか加えられていたのだつた。そして、吾平は人を殺した？小矢部吾平が、森中や仲条、そして、息子の岳男に語り聞かせた『黒部人柱伝説』は、非現実的な世界の話だから、あくまでも、虚構の話にしすぎなかつたが、実際にこの世で執り行われた人柱の話は、吾平とて誰にも語りたくない怖ろしい内容のものだつた。

だがいま……。

吾平は、忘却の彼方に押しやっていたはずの過去を再び、眼の前にしなければならぬ運命の下にあつた。

六月十二日、午後十時すぎの時刻。吾平は小さな旅行バッグを小脇に抱え、東京駅構内のタクシー待合わせ場所から一台のタクシーに乗った。

「お台場地区の三洋物流センターの建設現場に行つて欲しいんだが」

「ああ、前に一度客を乗せたことがあるな。だけど、いまのこの時間、あそこにはもう誰もいないんじゃないの」

と、タクシーの運転手が言った。

吾平は何も答えなかつた。

タクシーは都心を抜け、湾岸道路を指す。人、人、人の波だった…。

吾平には東京の街は人の渦巻くところに見えた。

（わたしは、自ら望んで殺されに行くのだ。いま、車の外を流れ去って行く、あの人の波は何だろう。もうすでに、過去へ過去へとわたしは、生きている人間たちの群れを押しやろうとしている）

脳裏を様々な当時の状況が横切り、吾平は何度か呟きを繰り返した。

アルピナBと冷凍車。二台の車は、都心を真二つに切り、東京南部の海側を指していた。先行したのはアルピナBだった。初台ランプを降りたアルピナBには、首都高速四号線から環状線に乗り継ぎ、南下した。

西新宿を出発した冷凍車も、アルピナBから遅れることニキロの距離で、同じ方角を指していた。二台とも、完全に追跡チームにマークされていた。

もはや、袋小路に追い込んだようなものだった。アルピナBは、覆面パトカーに追尾されていた。

この覆面パトカーは、警視庁差し回しのもので、比呂あすか殺人事件捜査本部の捜査スタッフが同乗していた。

パトカーからほぼ百メートルほどの間隔をおいて、富山県警の赤根刑事らに乗せたもう一台の覆面パトカーが湾岸道路を走る。もう一台、富山県警の覆面パトカーにつかず離れず、追跡車が続いてい

た。日報新聞富山支局の 仲条記者をキヤップにした追跡チームの車である。

俯瞰図（ふかんず）を見ることができれば、アルピナBも、冷凍車も、四台の追跡車の射程距離内に完全に捉えられていたことになる。

すでに黒塗りの大型国産車が一台、三十分前に台場地区に入った情報も各車の者は知っていた。

夜間の車の通行量は少ないので、この不審車の動きは、交通警邏（けいら）隊からすぐにもたらされた。

もちろん、これらの情報は森中の運転する車にも入っていた。

「みんな臨海部の台場地区を目指しているようだ。室堂建設がまた性懲りもなく手抜き工事をやる気 なら、お祓（はら）いだってしなきゃならんだろうな。話はどうやらファイナーレへと一歩近づいているようだ」

と森中が千香子に言った。

「例のファッション都市建設地区？」

「ああ、新聞発表では、ガキ共相手の原宿のファッション街に対抗して、大人のためのファッション街にすると書いてあったな」

「その第一期工事に着手中」

「地下シールド工法かなにか知らんが、これまでの何回かの人身事故のお祓いでもする気になっているんじゃないか。やつらは」

「つまり室堂建設の長門一族が、今度の

黒い司祭者の役を取り仕切っているって事かしら？」

「闇の中からぬっと姿を現すかどうか」

「でも、小矢部吾平はどうなるの？」

「こればかりは、運を天に任せるしかないよ。おれたちは小矢部吾平の姿はいまは完全に見失っているんだから」

「でも考えてみれば、ものごとのきつかけというか、この追跡行の場を用意してくれたのは小矢部さんよね」

「そうだな。彼のSOS発信で、みんなが一つになって動き出した。おれはことはいいい方向に動いていると思う。あまり悲観的に考えるのはいまは止めている」

森中の運転する車は東京湾に接したお台場地区にすでに入っていた。

時に午後十時三分のことである。

アルピナBは途中、晴海埠頭の展示会場横の広場に到着、停止し、別の車を待機する様子を見せた。

このとき、追跡班は二手に別れていた。警視庁特捜班の覆面パトカーは先行する富山ナンバーの冷凍車から五十メートルほどの距離をおき追走中だった。

そのあとに、日報新聞東京本社の森中が運転する車が続く。

アルピナBは、赤根刑事の指揮する富山県警の覆面パトカーが追った。途中、交通渋滞の時機を利用し、道不案内の富山県警特捜班のために、警視庁の捜査員が一名、この車に乗り込んだ。

代わりに赤根刑事が第一線行動部隊の

警視庁の覆面パトカーに単身加わった。仲条記者らの日報新聞取材班、富山県警の覆面パトカーが後援部隊として続く。

電話で、仲条と森中は、五分おきに連絡をとり合っていた。

「先輩、いま、黒塗りの高級車が一台、晴海埠頭展示会場前の広場に到着、われわれが予想したとおり、待機していたアルピナBと合流しました」

「たぶんその車には室堂建設会長の長門蓮作が乗っているんじゃないか。こちらの予定だと、それに社長の長門啓作が加われれば、われわれの考えていた黒い司祭者チームは全員、顔を揃えることになる」

「殺人実行部隊と思われる暴力団、統正会は？」

「冷凍車の中に何人いるかだ。場合によつては、すでに、黒い司祭場に、パンチパーマに黒装束の殺し屋社中の揃い踏みが見られるかも知れない。お台場地区がたぶんその儀式の場だろうが、夜はほとんど真暗闇の埋立て地帯だ。やつらは正気で、また、人柱を立てる気なんだ。そのために、すでに三人の首が狩られた」

「…そして四人目が小矢部吾平さん？何としても、それだけは阻止しなければ」

「サツだって抜かっちゃいけないさ。何より、冷凍車の中に隠されたものが問題だ。われわれじゃ中味を検分という



わけにはいかんが」

「冷凍車はもうお台場地区に入ったんでしよう」

「うん？ちよつと待て。おい、電話は切るぞ。不審車発見だ」

そう言い、森中は電話を切った。

「タクシーよ。猛スピードでわたしたちの車を追い越して行ったわ」

湾岸通りは夜とは言え、行き交う車はあった。特別にタクシーが不審というわけではなかったが、この時間、まだ居住区域として整備されていない台場、晴海、有明方面に向かう車は大部分が業務用の車だった。

「小矢部吾平が台場にもし向かうとすれば、道先不案内、タクシーを利用するしかない」

どちらの道かと森中は頭をめぐらせたのだ。道路は二車線の一本道だった。森中は逆に車のスピードを落とした。先行車はなく、うしろを追って来る車の姿もなかった。

行先右手の整備地区の一角に、すでに外装も整い、三カ月後にオーブンする輸出品配送業務を一手に引き受ける三洋物流センターの白い建物が見えてきた。

「ちよい待ちだ」

森中はブレーキをゆっくりと踏み込み、車を徐行状態にした。

同時にヘッドライトも消した。

「あのタクシー、あの建物の敷地内に

入って行った。おっ、待機していたらしい別の車が急にヘッドライトをつけた。何かあるぞ」

森中は言いハンドルを左に切りと道路の端に車を寄せ停めた。白い建物を視野の内に入れられる距離を保った。

「ともかく、この先、五百メートルほど先に例の工事の一部始まっているお台場ファクション地区予定地がある。三日前におれは工事現場に昼間行き下見をしてきたが、基礎工事をするためか、深いボーリングの穴がいくつも掘られていた。夜は無人地帯になるはずなのに、すでに冷凍車は現地に近付いている。警視庁のパトカーも音もなく接近している頃だ」

「車が動き出したわ」

「タクシーから降りた男がいるな。おっ、迎えのために車が近くに寄った」

二人はフロントガラスの向こうの闇に眼を凝らした。

が、いつとき、Uターンしたタクシーのヘッドライトに二人は眼を射られた。

タクシーが砂地を蹴立ててその場をあとにしたとき、待機していた車はすでに、タクシーから降りた男を車内に呑み込んでいた。

「どちらに向かう？もどるはずはない」

森中が言ったとおり、待機車は車首を台場地区にと取った。

「小矢部吾平さんの動きが気になるわ。」

あの車に乗せられたのは？」

「かも知れない。これまでの筋書き通りとすればな」

森中はアクセルを踏み込んだ。

待機車のあとを追った。

台場地区は暗い闇に閉ざされていた。ファッション地区に指定された場所では一部工事が開始されており、基礎固めに入っていた。

何台もの大型クレーン車、それにシヨベルカーが、黒い影だけを、闇間にさらしている。地底が深く抉られたあたりに、数人の人影があった。

みんな無言であった。

警視庁の追跡車は、前を行く冷凍車がスピードを緩めたとき、歩調を合わせ車のスピードを極端に落とした。

次にヘッドライトを消し、工事に造成されたアスファルト道に入ると、車のエンジン音も落とし徐行体制に入った。

車のハンドルをゆっくりと切り、アスファルト道から横に外れた。

「冷凍車の止められた場所に行き、不審質問する。相手はマル暴一暴力団一の連中かも知れんから用心するように。あとから来るアルピナBに、晴海埠頭で合流したらしいもう一台の車は、あと四、五分で、たぶん、この場所にやって来るだろう。それから応援部隊の富山県警のパトカー、並びに他の車は、ここから五百メートル以内の

場所で待機 するよう伝えてくれ」

警視庁の覆面パトカーに同乗していた赤根刑事が、目黒署の捜査員に告げた。赤根刑事は三人の部下を連れ、このとき、闇の中に一步踏み出していた。先着した覆面パトカーから、富山県警のパトカー、日報新聞富山支局の追跡班の車、そして森中に千香子に乗せた各車に、待機命令が伝達された。

すでに、冷凍車は、地中に支柱を打ち込む大型掘削機のある場所のあたりに、止められていた。

赤根刑事と目黒署の私服警官たちは足音を忍ばせ、冷凍車の止められている場所に近づいた。

彼らとしては、ここに集まった者たちを犯人として扱うだけの証拠は何一つとして握っていないかった。

冷凍車は何のためにこの場所にやって来たのか？

そして、冷凍車の中味は何なのか？

この二点を追及するほかは、いまは、具体証拠を握る方法は残されていないかった。冷凍車から降りたらしい男が二人、人待ち顔に工事現場の一角に立っていた。

まったく、用心しているふうはなく、男たちは煙草を喫っていた。

赤い火がつく度に、男たちの顔が、闇の中に浮かび出た。

赤根刑事らは、身をかがめ、足音を忍ばせて一步一步と冷凍車に近づいた

。三メートルまで近づいてから相手の様子を窺った。

「まったくこの真夜中に、首の運搬役とはついてねえ話よな」

「いいじゃねえか。おれたちやこの仕事のお蔭でたんまり稼いだんだから」  
「だがよっ、首のあたりが、ぞくつとして来ねえか」

そう言った男は、煙草の火を投げたあと、土の穴に向け、しゃあしゃあと音を立て立小便をした。

その間に赤根刑事が立小便をしている男の背に立った。他の二人が、もう一人の男の両脇を固めた。

人の気配に気づいた二人は、闇の中でぎよつとし、身を縮ませた。

「お、おい、何だよオ」

二人の刑事にはさまれた男が、怯えた声を上げた。

「いま、首がどうか言ったな。警察の者だ。冷凍車の中味を改めさせてもらおうか」

「待て、待てえ。中味は空っぽだぜ。」

あんたら一体、何を考えてんだよ」

立小便をやっと了えた男が、赤根刑事に喰ってかかる。

「この野郎！手も洗わないでおれの体に触れるな。抵抗するなら否応なくぶっ放す。てめえの太腿をハジキで射ち抜いてやろうか」

赤根刑事は腰の拳銃に手を掛けていた。

「おれは運転を頼まれただけさ」

と、もう一人の刑事に腕をねじ上げられた男が言った。

「鍵をよこせ。それから二人共、両手を頭の上にあげてホルドアップしてろ」

赤根刑事は男の一人から車の鍵束を預かった。目黒署の刑事は拳銃を抜き、ホルドアップした男たちの眼の前に拳銃を突き出し、二人の自由を奪った。

赤根刑事は鍵を手に、後部扉の前に立った。さすがに胸がどきどきした。

鍵穴に鍵を差し込むと、扉横手についている開閉フアンドに手を掛けた。

把手をはね上げると扉は開閉自由の状態になった。あとは両手を使い、一枚扉をゆっくりと上に上げた。

白い冷気が吹き出して来た。赤根刑事の顔にもその冷気が吹き掛かった。

白いもやの中から、発泡スチロール製の箱が三個浮かび上がって来るのを赤根刑事は眼にした。

冷凍車の中には他に荷はなく、がらんどろだったので、白い三個の物体は、冷気が払われたとき、白い骨箱のようにも赤根刑事には見えた。所持していた懐中電灯で照らし出す。

「おい、これは何だ？」

捕えた男の一人に、赤根刑事が鋭い口調で詰問した。

「預かっただけですよ」

「誰にだ」

「そんなこと知りませんよ」

「ま、いいだろ。預け主はもうじき、ここにやって来るわけだからな」

赤根刑事は言い、一人、冷凍庫の中に足を踏み入れた。

用意していた白い手袋をはめてから、発泡スチロールの箱の一つに赤根刑事は手を掛けた。

丁度、首が一つおさまるぐらいの角型の箱は、水産物の輸送用に使われる小型のものだった。

「南無阿弥陀仏……」

赤根刑事は心の中で何度も念仏を唱えた。中味が何であるかは、すでに、赤根刑事にはわかっていた。

蓋のまわりはガムテープでしっかりと止めてある。赤根刑事はゆっくりとガムテープを外した。

もう一度、蓋をとるとき、

「ナムアマミダブツ……」

と赤根刑事は唱えた。

今度はちゃんと声を出し念唱した。

蓋を半ばほども開けたとき、人間の髪の毛が眼に止まった。一瞬、眼にし、すぐに、赤根刑事は蓋を閉じた。

髪を感じから女性と思われた。赤根刑事は首の入っているらしい白い箱を冷凍庫の床にもどした。

白い箱を元の位置にもどしたとき、初めて、四角い箱の一面に、一枚の札が貼られているのに気付いた。懐中電

灯の明かりをその面に向けた。

### 變女轉男

と、四文字がはっきりと赤根刑事には読めた。

(こいつらやっぱり…)

赤根刑事の身の内にぞくぞくつとした戦慄(せんりつ)が湧き起こった。恐怖感ではない。いわゆる武者ぶるいというヤツだった。

もちろん、犯人共を追い詰めたという刑事稼業ならではの満足感もある。

冷凍庫内から地上に降り立った赤根刑事は、ホールドアツプさせていた二人の男どもを、その場で、現行犯逮捕した。

人間の首を所持している者たち、殺人の罪にだつて問える状況である。

それから赤根刑事ともう一人の警官は、男どもを一旦、冷凍車の中で拘束することにした。

手錠を噛ませたあと、二人のジャンパーの袖口で、それぞれに猿轡(さるぐつわ)を噛ませた。

一仕事了えたあと、赤根刑事らは後続車が来るのを待った。

「冷凍車の停まっている場所にやってくるに決まっている。奴らは外に出て、先発隊と合流する。素知らぬ顔で迎えに出て、外に出た奴の腕をねじ伏せ、全員逮捕だ」



その赤根刑事の次の作戦が他の二人に伝わったとき、闇の道の向こうに車のヘッドライトが一つ躍った。

「冷静にな。われわれは奴らの仲間に一時なつてやる」

私服の四人は所在なげに、冷凍車に身を寄せた。間もなく、がたがたした道を、車体を前後に揺さぶりながら、一台の国産車がやって来た。

タクシーから降りた男が三洋物流センター前で黒い国産車に移乗させられたという情報はすでに赤根刑事らは入手済みであった。

国産車は、その不審車にちがいがなかった。工事場用の仮設の電柱が十メートルほど先にあつて、薄ぼんやりとではあつたが人影は見えた。

到着した車の中から、三人の男が降りて来た。肩肘張ったガニ股歩き、虚勢を張った歩き方から判断すると暴力団関係者らしい。

赤根刑事が先頭を切つてやって来た男に向かい、他の一人は側面に回り、三人目の警官は止められた車のほうに向かった。顔と顔が合ったとき、赤根刑事はニューナンブ式三八口径の拳銃を、いきなり、男の眼の前に突き出した。

「お役目、ご苦労だな」

「何のまねだア、こりゃあ」

赤根刑事の出現にリーダーらしい男は半分冗談と思つたらしく、少し間抜けた声で応じた。

「お前らもホールドアップだ。おれの顔が見えないか。サツの人間はな。それらしい顔をしているものだ。よく見ろ！」

やっと男は状況判断ができたらしく、渋々とではあったが手を上げた。

赤根らは三人の男を冷凍車の車体に向けて後ろ向きに立たせ、身体検査をしたあと、全員に手錠を掛けた。この身体検査で二丁の拳銃が押収された。お荷物の男たちは冷凍車内に全員ぶち込まれた

「赤根刑事、こちらへ来て下さい」

車を見張りに行った一人が赤根刑事を呼んだ。急いで赤根刑事は駆けつけた。

「車の中に一名、どうやら抵抗できなくされているようです」

その声に赤根刑事が車内を覗き込むと毛布をすっぽり頭からかぶされた者が、後部座席にいるのが見えた。

赤根の名を聞いて、男と思われる、捕われ人は、丸めていた背を真直ぐに伸ばした。すぐに救出のために、警官が手を貸した。毛布が剥がれ、男の顔が露わになった。

「おっ！小矢部吾平か。やっぱりな」

「赤根さん……」

二人は会話を交わしたあと、しばらく黙ったまま、お互いの眼と眼を見凝（つめ）め合った。

縛られていた手のロープが解かれ、小矢部吾平は自由の身になった。

車の外に出た小矢部吾平は、赤根刑事としっかりと抱き合った。

二人とも声はない。

「アル。ピナBが接近中です」

と警官の一人が赤根刑事に伝えた。

「よし、話はあとでな。奴らを今から一網打尽（いちもうだじん）にしてやる」

赤根刑事は言い、あとの警官を促すと、全員、冷凍車の陰に身をひそめ、アル・ピナBの到着を待った。

眩い黄金の矢のガードラインを車体にほどこされたアル・ピナBが、長野・大町からの長い旅を了え、東京港十二号埋立地内の一部に停止した。

車からは誰も降りて来ない。

晴海埠頭で待ち合わせた車を待っているのだろう。が、その車も一分とは遅れずに同じ地域内にやって来た。

アル・ピナBが、ヘッドライトを明滅させ、居場所を教えた。

「全員到着か。何か奴らはこの場所で儀式を始めるつもりだろう。援軍の連中も問もなくやって来る。どうするかだな。賑々（にぎにぎ）しく到着する前に全員を拘束しておいたほうが無難だな。よし、丁重にお迎えしよう」

赤根刑事ら三人は双手に分かれた。

赤根刑事はあとから到着した車に一人で近付いた。拳銃はもう帯革におさめていた。扉を開けるために駆け寄る。

暴力団の手下の役を赤根刑事はつとめた。後部扉が開いた。

老人がまず、車を降りて来た。

鈍い外灯の明かりがわずかに老人の横顔を写し出した。杖をつき、老人はゆっくりと歩き出した。

赤根刑事はこの老人の顔は知らない。次に六十がらみの男が続いた。

相手は気付かなかったようだが、赤根刑事は老人は長門蓮作、五十年配の男は長門啓作と確信した。

二人共、大柄であった。

運転手兼ボディガード役の男が、長門家の二人の背についた。相手が口をきいてくれないので赤根刑事は助かった。

先導役をつとめたのではないが、三人の男たちは冷凍車の方角に向かった。

アルピナBから降り立った者たちは二人いた。真如尼こと野々村芳子と、付人の耳の大きい老人だった。

冷凍車前の広場に男が四人、女が一人、顔を揃えた。

赤根刑事らは五人の周りを取り囲んだ。と、このとき、覆面パトカーから通信指令が出され、この場に来るのを許可された三台の追跡車が次々に、猛スピードでやって来た。

ヘッドライトで冷凍車前の広場のあたりを白く焙り出した。

「何事だ？いらぬ者共がこの場に？」

老人が嗄れ声で言った。

他の者たちも何か口々に叫び声を上げたようだったが、車の急ブレーキ音に掻き消された。

到着した車から何人ものが飛び出し、またたく間に、司祭者たちの周りに人垣を作った。

森中弘光、宮坂千香子、仲条立彦の記者連、そして富山県警の応援部隊、六名の者が新たに加わった。

仲条は勇躍、赤根刑事のそばにつく。

赤根刑事がとてもかっこよく見えた。

「長門蓮作をはじめ五名の者は、庄川征雄、野々村久美、長門雅樹殺人事件の重要参考人としてご同行いただきたい」

朗々とした赤根刑事の声が、あたりに響き渡った。

「何を馬鹿な。どこのもんか知らんが、わしは政治家にも顔が利く。余計なこと化するな。あとでお前らの首が飛ぶぞ」

と、蓮作は胸を張り、赤根刑事らを一喝した。

「首が飛ぶだと？この冷凍車の中に何が隠されているかすでに調べずみだ」

「ま、まさか、お前たち……」

「殺人並びに死体損壊罪、身に覚えのあることだろう」

と、赤根刑事が今度は、蓮作らを一喝した。いきなりカメラのフラッシュが焚かれた。森中と仲条の二人は、捕われ人になった五人の者たちの顔にフラッシュの雨を降らせた。

「少年を一人保護しました」

と、警官の一人が赤根刑事に報告した。長門蓮作らが乗って来た車の後部トランクに、猿轡をされ手足を縛られた上、

毛布に包まれた少年が閉じ込められているのが発見された。

五名の男女は二台の覆面パトカーに収容され、直ちに目黒署に向け出発して行った。そのあとに、警官が運転する冷凍車が続いた。

赤根刑事の特別の慮（はから）いで記者チームは、冷凍車内の写真を数枚だけ撮影することを許可された。

三つの角型の箱は三つとも表面に魔符が貼られていた。『變女轉男』の札の他のものは『黒い雷鳥』が四羽あしらわれた魔符だった。

赤根刑事らが現場を去ったあとこの場の主役は小矢部吾平になった。

地下三十メートルも掘られたボーリングの穴が五十メートル間隔に四つあった。基礎工事中で、この四つの穴にはやがて太い支柱が打ち込まれるのだろう。

「わたしも首を落とされ、この深い地獄の穴に……」

吾平は恐々、幅二メートルはあろうかという暗いホールの底を覗き込んだ。

現代の世に残る人柱の風習？

この話を解明するには小矢部吾平のこれからの告白を聞かねばならないことだった。

（もし、小矢部吾平が、殺されていたら？）

仲条立彦は、小矢部吾平の後ろ姿を見ながら、そんなことを考えていた。

暗い四つの支柱の底に、連続殺人事件

を解く鍵も、謎の魔符の存在も永久に封印されて終わっただろうと、仲条立彦はいまさらのように感慨を新たにした。

森中や千香子とて同じ思いだった。

日報新聞の記者チームは大スクープも、ものにしていった。

そのことに思いが行ったとき、まだ、新米記者の仲系立彦の膝はがくがくとしふるえ始めた。

歯の根さえ、かちかちと鳴り始め、他の二人に悟られまいと仲条立彦は必死に歯を喰いしばった。

(第五章 了)